捜査線上のアリア

森村誠一

講談社

捜査線上のアリア　　定価　九八〇円

第1刷発行　昭和56年8月20日

著　者　森村誠一
発行者　三木　章
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽2—12—21
電話　東京(03)945—1111(大代表)
振替　東京8—3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えします。
© SEIICHI MORIMURA 1981 Printed in Japan

0093-307660-2253（0）　（文2）

目次

減点的入選 5
斬り取ったヒモ 18
自縛のヒモ 33
謎の同行者 52
魂の切売り 61
放棄された被害品 73
品触れされた殺人 92
銀輪のミス 99
傍聴された料理 115
公用の密輸 133
創立記念の銀輪 148
剽窃された現場 157
疚しいモデル 174
盗まれたアリバイ 183
アリバイ記念撮影 199
窓の灯 225
鏡の告発 232
エピローグ 248
あとがき 262

裝丁——辰巳四郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

捜査線上のアリア

減点的入選

1

どんな人間でも他人から注目されるときが、人生において三度あると言う。それは誕生、結婚、そして死のときだそうである。しかし望まれずして生まれた人や、生涯独身を通した人や、孤独な死を迎えた人には、これは当てはまらない。一般論として考えれば、平凡な人間でも、その一生の間に三度くらいは主役になれるということであろう。

津村豊和の場合、まず中流の家庭に生まれ、人並みに結婚もし、これから先、特に大きな不幸にでも見舞われないかぎり、ごく平均的な人生の終止を迎えるであろうから、一般論が該当するとみてよい。

その一般論を踏まえれば、津村は、人生に四度人の注目を浴びたことになる。と言っても再婚した

わけではなく、ある特殊な状況下において、主役になったのである。

津村は、東京のある私立大学を卒業後、大学の就職斡旋部の世話で、ある市中銀行へ就職した。預金高では常に上位を占め、名前を言えばたいていの人は知っている。まずは一流の勤め先であった。

津村も初めの間は、この銀行に骨を埋める覚悟で、希望に燃えて出勤した。銀行は融資を通じて日本産業界を支配する。銀行こそ経済の主役であり、財界の帝王である。まじめに勤めていればいずれは支店長から、重役、頭取も夢ではない。

親や親戚は、彼が一流銀行に就職したことを祝着し、友人たちは羨んだ。事実、銀行の待遇は抜群によかった。水準を越えた基本給に一人一万円前後の家族手当が付く。これに諸手当と年四回のボーナスが加わる。独身者には一DK以上、世帯持ちには三LDK以上の社宅が用意される。学校を出て、入社（行）と同時に結婚しても、十分生活できるようになっている。

入社後半年ほど都心の本店勤務になった津村は、エリートの自矜に胸を張ってビジネス街の中でも一際偉容を誇る本店の重厚なビルに出入りしたものである。その建物は自分の活躍舞台であり、その圧倒的偉容と、威厳ある意匠こそ、将来の自分を象徴するものであると、自意識を快く擽られた。

それが二年もしないうちに、初期の情熱が萎んでいった。仕事の大要がおおむね視野におさめられ、示威的な建物の中の銀行の本体がわかるにつれて、十年、二十年後の自分の姿もおおむね予測できるようになってきたからである。

まず彼の情熱に最初の冷や水をかけたのは行内の昇進システムである。二流私大出の津村は、どんなに頑張ったところで重役になれない仕組になっていた。重役はおろか、支店長もおぼつかない。私大出の最もふんばり、運がよかった者が、停年間近になって行内で「裏通り」と呼ばれる三流店の支店長のポストをあたえられる程度である。

津村がその最も運のいい部類に入ったとしても、支店長なるポストが、永遠につづく預金獲得の途方もないノルマの達成によって辛うじて維持されるものであった。

津村は、半年後、地方の支店へ出された。花の本店勤務も、大学卒業後半年だけで、以後、二、三年きざみに地方支店を転々と回された。

預金の獲得は銀行員にとって至上命令である。預金を集められない銀行員は出世の道を閉ざされるばかりか、銀行にいることもできなくなる。

津村の銀行では、新入の男子行員はまず預金集めの第一線である得意先係を担当させられる。ここで多くの預金をかき集めて来た者を昇進の階段に乗せる。預金集めは、係長、副長、次長とポストが上がるほどに苛酷になる。支店長だけノルマの割当てはないが、支店単位の目標額の責任を負わされる。各支店はブロック別にその地域の大型支店の統轄下にあり、目標額達成のために絶えず尻を叩かれる。大型支店は本店の統轄に伏し、かつて天皇に統率された日本帝国軍隊のように鉄の命令系統によって組織された中央集権体制を形づくっている。〝中央政府〟に忠誠を示すために支店長自ら陣頭に立って、「店周外訪」と銀行用語で言うところの預金集めの戸別訪問に精を出さなければならない。

朝礼から始まって、課長に提出した「訪問予定表」の下に一日三十〜四十軒の家庭を訪問しなければならない。一日単位のノルマは、月単位の「月間工作計画表」によってさらに搾めつけられる。仕事の厳しさだけでなく、服装、言葉使い、立居振舞にわたってまで規制される。

大学出の一流銀行のバッジをつけた身が、メタンガスのにおいのするドブ板を踏み、小便臭い路地を伝って、一円でも多く預金をかき集めるべく卑屈に頭を下げつづける。どんな程度の悪い相手でも、相手はお客様である。

いったい自分は何のために、だれのために預金をかき集めているのか。プライドを忘れ、屈辱に耐えて集めてきた預金が何の役に立つのか。このような疑問を抱いたときは、すでに銀行員として失格である。

預金獲得に一片の疑惑でもはさんだときから、彼は銀行員の生存競争に敗れたのである。

津村は、銀行員にとってタブーの疑惑を抱いてしまったのである。生存競争で、少しでも弱みを見せた者は、たちまちライバル共の餌食にされてしまう。疑惑を抱いたときから、津村の成績は目に見えて落ちてきた。

銀行の中には、預金集めの才能のない者もいる。彼らはもともと銀行に適いていないのである。彼らが銀行で頭角を現わすことはない。だが才能がないだけで、疑惑を抱かなければ、単純事務や、後備、補助的な仕事をあたえられて、飼い殺しにされる。疑惑を抱いた者は銀行の至上命令に反抗した者であり、反乱を企てた者として、容赦なく放逐されるのである。明からさまに追い出されないまでも、とうてい居たたまれない雰囲気になってしまう。

津村が銀行に対して決定的に失望したのは、減点法による人事考課法である。最初に持ち点をあたえて、ミスがある都度、減点していく。自分自身のミスによらず、同僚や部下がミスを犯しても連帯責任や監督不行届で切符を切られる。

銀行で生き残ろうと決意したからには自己防衛の垣を固く張りめぐらさなければならない。周囲はこと仕事に関するかぎりすべて敵であり、カメのように常に甲羅の中に身をすくめて周囲をうかがっているような人間ばかりになる。新入社員の研修において、「常に自己の防衛を忘れるな」と教えるほどに減点主義は徹底している。

津村が入社してちょうど十年め、H県のある温泉都市の支店にいるとき新見という同僚が自殺をし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。彼は得意先係の主任であったが、内向的な理論家で、営業畑よりも内勤のデスクワークに適いていた。銀行でもそれを見て取ったらしく、預金係から調査係への配置がえを内示していた。それを苦にしての自殺ということであったが、ノルマの締めつけや減点主義による周囲皆敵の社内の雰囲気が彼の神経をボロボロに蝕んでいたらしい。

新見と支店内では最も親しくしていた津村はショックをうけた。他人事ではないとおもった。自分も銀行に留まっているかぎり、いずれは新見の二の舞を演ずるような気がした。

津村が、銀行をやめたいと妻の規子に漏らすと、彼女は、

「やめてどうするの？」と当然の質問を発した。

「いまは具体的な当てはないけれど、このまま銀行にいると、おれはだめになってしまうよ」

「でも次の仕事がはっきり決まらないうちにやめたりしたら、生活に困るわ。社宅にだっていられなくなるし」

妻は、夫が曲がりなりにも十年勤めた職場をやめたいと言いだした理由よりも、その結果として失うことになる居心地のよい屋根を案じていた。

「なに、当分は退職金もあるし、失業保険も出る。そのうち、退職金で小さな食べ物屋でも始めよう」

温泉リゾート都市だけに、市内には食べ物関係の店が多い。素人でも手軽に始められそうに見える。

「なに言ってんのよ。十年勤めたぐらいで、どれほどの退職金が出るとおもってるのよ。たとえそのお金で食べ物屋を開けたとしても、いま市内は飲食店が多すぎて、共倒れが続出しているじゃないの」

妻のほうが現実をよく見ていた。
「べつにいますぐやめるとは言ってない。他にもっとよい仕事があったら変りたいなという程度の気持なんだ」
津村は、妻の反対が強そうなので、初めの観測気球を引っ込めることにした。
「三十を過ぎてから、いまの銀行よりもいい仕事なんてないわよ。またなんだって急にやめたいなんておっしゃるのよ。なにかいやなことでもあったの？」
規子は最初に発すべき質問をようやく出した。
「いやべつに」
津村は言葉をにごした。彼の情熱の冷えた過程を妻に語ったところで理解してもらえないだろうとおもったのである。
銀行に対して絶望していたが、簡単にはやめられない「生活」という壁が立ちはだかっていた。ノルマに締めつけられ、減点主義に痛めつけられていても、銀行があたえてくれた餌はたっぷりあり、ほどよく味つけされていた。十年間その味に馴らされた後に、飼い主のない荒野に出て、餌を自ら探し当てる能力が自分にあるか、はなはだ自信がない。銀行という檻の中で飼い馴らされている間に野性を失ってしまったのである。妻もいまさら居心地よい檻から出て行くのに反対している。その抵抗も決して小さくはない。この時期に一つの事件が起きなければ、津村も結局、銀行に飼い殺されてしまったかもしれない。
この事件は彼にとって幸運とも不運とも言えるものであったが、どちらにせよ、彼の人生の方向を変える転機となった。

2

津村は、小説が好きだった。学生時代はあまり読まなかったのだが、仕事に対する情熱が冷えていくにしたがい、小説を読むようになった。読むものは、時代小説であれ現代小説であれ、あるいはまた、純文学や大衆小説、推理、SF、社会、恋愛、経済、冒険活劇、怪奇ものなどジャンルを問わず手当たり次第に乱読していた。それが次第に現代物の経済小説や社会派推理小説に好みが集中していった。

仕事に自分を見出せず、職場に所を得ない虚しさと寂しさが、現代人の不安や疎外感および現代社会のメカニズムや病蝕を描くそれらの小説に身につまされるような共感をおぼえたからである。

時期を同じくして、社会のさまざまな職業分野を踏まえた作家が輩出した。彼らはこれまでの純文学の作家のように同人誌や〝文学的環境〟の中でしかるべく文学修業を積んだ後、作家になったのと異なり、社会の全方向に職業人として埋没し、それぞれのプロフェッショナルを作品世界として登場して来た。

それらの作品にはこれまでの冠婚葬祭や病気、飲食、セックスなどの個人の身辺些事を専らテーマにした小説と異なり、津村自身が埋没し、生存競争に悪戦苦闘した、社会そのものが描かれていた。

在来の小説はたとえそこにどんな深刻な人生が語られ、人間の真実というものが追究されていても、津村の人生とは透明なプラスチックの膜によって隔絶されているような気がしてならなかった。読み了えてそれなりの感動や感嘆はあたえられるのだが、脳の一隅に「しかし、これは自分の世界のことではない。自分とは別種の人種だ」という声が残るのである。

それが、職業人出身の作家による作品を読んで津村は「これこそ自分の世界を描いたものだ」と膝

を打った。そこにはまぎれもなく彼の呼吸する世界があった。登場人物は彼と同じ人種であり、組織の下積みとして圧迫され、同じ傷口から同じ血を流している者であった。もはや彼らとの間に透明な膜はない。

彼らは文学修業をする代りに、社会の生存競争に職業を通して直接もまれた。人生の描出を観念の上で技巧的に磨くかわりに、人生そのものとの格闘によって、果たした。津村は道場剣法の〝型〟を示された後、生ま生ましい実戦剣法を見せられたようにおもった。そして自分もそのような小説を書きたいとねがった。ただねがうだけでなく、これまでの職業体験を土台にして一編の小説を書いた。

でき上がった小説を読み返してみて、自分ながらよくできているように感じた。これならば毎月の小説雑誌に発表される既成作家の作品に比べて遜色ないような気がする。いや虚名にアグラをかいて内容のない作品を書き飛ばしている有名作家のものよりはるかによいようにおもえる。

小説は、人に読まれることを意識して書くものである。津村も自分の初めての作品をしかるべき舞台に発表したくなった。だがそんな舞台がすぐにあろうはずがない。そこで、たまたま目に触れた中央の文芸雑誌の懸賞小説に応募したのである。そしてそれが幸運にも入選したのであった。

せめて最終候補ぐらいまでいけば儲けものだとおもっていたのが入選したので、津村自身が驚いた。入選したとは言うものの、各選考委員の選評はかなり辛辣であった。

A委員は、「おもいつきだけで描いた作品であり、筆先から人間の脂が遊離している」と評し、B委員は、「いずれもドングリの背比べであり、積極的に推すべき作品はないが、必ず入選者を出すという主催者側の大前提があるので、比較的失点の少ないこの作品を選んだ」と言い、C委員は「この新人の才能が本物であるか、まがいものであるか、次作を待つことにしよう。今回はとりあえず〝仮免〟ということにしておこう」と書いた。

小説においてはたしかに彼らは先輩であるが、言いたい放題の選評ぶりに、津村は腹が立った。なに、ドングリだろうが、仮免だろうが入選してしまえばこちらのものだとおもい直した。

それにしても、減点法の人事考課にいやけがさし、十年の職場をやめたがっていた身が、減点法で懸賞小説に入選したとは、皮肉である。

3

津村の入選は、行内で評判になった。上司や同僚たちも「きみにそんな才能があったのか」と驚いた目を向けた。驚きの底に嫉妬や羨望もある。彼の入選は本店のお偉ら方の耳にも達しているにちがいない。

妻は手放しで喜んだ。親戚や知人が次々に電話をかけてきたり、祝いの電報を打ってきたりした。近所の者の彼を見る目が変ったようであった。

身近の人間だけでなく、地元のテレビ局や新聞社がやって来た。実際に東京に距離感のあるその地方で、中央の一流文芸誌の新人賞に入選することは、ちょっとしたニュースであった。

テレビに出演し、地方紙のインタビューに応じていると、自分がちょっとした有名人になったような気がした。事実彼はその地方の有名人になっていた。インタビュー攻勢がひとまずおさまると、講演依頼が相次いだ。市民講座、文化団体、各種サークル、地元企業などから礼を厚くして講演を依頼してきた。次に地元テレビやラジオがクイズ番組やディスクジョッキーのレギュラー出演をリクエストしてきた。彼はそれらの依頼を逃すことなくすべて引きうけた。

銀行でいかにノルマの達成に励んだところで彼が〝主役〟になることはあり得ない。

だが、マスコミその他の依頼は、まぎれもなく彼に主役として出演を求めているのである。津村は

いい気分であった。三流支店の片隅にくすぶっていた存在が、突然眩しい脚光を浴びせられて社会の中心に据えられた。いまさらおかしくて小商人や安アパートの住人に頭を下げて小銭なんかをかき集めていられない。

銀行の上司も一目おいている。マスコミ出演のために仕事を休んでも銀行のイメージアップにつながるからと大目に見てくれる。支店長は銀行のために頑張ってくれなどと世辞を言った。道を歩いていても人の視線を感じる。

サインを求められたことすらある。こんなことはこれまでにはなかった。

だが津村はここで重大な誤算を犯していた。地方名士として浮かれている間に、入選者がなにをおいても取り組まなければならない「受賞後第一作」の執筆を怠っていたのである。忘れていたわけではないが、連日目先の忙しさに追われて、執筆のためにじっくりと腰を落ち着けられなかった。

作品を書くという作業は孤独であり、地道な努力の積み重ねである。敵意に充ちた原稿用紙の白いマス目に、心の中を模索して一字一字探り取ってきた文字を嵌め込んで作品世界を築き上げていく。

そんな苦しい世界に自閉するより、マスコミにチヤホヤされて主役を演じているほうが格段に楽しいし、楽である。作品の執筆が深く沈潜するための自分の精神の穴掘りであれば、マスコミで遊ぶのは、祭りに参加しているようなものである。いったん祭りの味をおぼえると、なかなか穴掘りに戻れない。津村のような「一作作家」でもマスコミは「先生」と持ち上げてくれる。それは作品を長い時間をかけて書き上げ、編集部のチェックをうけて発表されてから初めて評価が下されるのに比べ、なんと敏速な反応であろう。

入選後、日数が経過するにつれて、編集部のほうもあまり第一作の催促をしなくなった。津村も気にかけながらも、そのうちに書いてもっていけばいいだろうと高をくくっていた。とにかく何百倍と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com